



# 多肢選択式テスト 作成の心得

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

今回は客観テスト、とりわけ多肢選択式テストの作り方を扱う。多肢選択式テストは、作成にはやや手間と時間がかかるが、採点が客観的で手間がかからないために、よく用いられている。多くの教師に比較的手軽に使われている手法ではあるが、特に選択肢の作成には、多少の専門知識が必要である。以下、多肢選択式テスト作成の心得をまとめてみる。

## 選択肢の長さを揃える

多肢選択式テストでは、まず選択肢の長さを揃えるように注意したい。内容理解に関する問題の選択肢では、正解の選択肢には多くの情報を盛り込んで正確を期そうとするために、長くなる傾向がある。しかしながら、長い選択肢は目立つために、その問題で問うている知識や能力がない受験者も選択する可能性が高くなってしまう。選択肢を書き終えたら、長さのチェックを忘れないことである。

## 正解の選択肢の位置

正解の選択肢が、たとえばA～Dのうちのどこに置かれているかというチェックも重要である。テスト作成者には、それぞれ「正解の置き癖」というものがあるので、注意が必要である。「あの先生の正解はたいていCだ」というような傾向があるとすれば好ましくない。問題がすべて出そろったところで、正解の選択肢の分布を確認し、もし特定の選択肢に偏っているようであれば、調整するとよいだろう。

## 「正解／誤答くさい」言い回しは避ける

理解力を問う問題は、テキストなしで解答できる問題になっていないか確認するとよいだろう。常識

で選べてしまうような選択肢を作らないということももちろん重要であるが、「正解／誤答くさい」言い回しがないかという視点も重要である。たとえば、sometimes, never, only, alwaysなどの語の使用は避けるようにといわれている。sometimes, some of the ..., may ...などの幅のある表現を含んだ選択肢は内容に合った選択肢である可能性が高く、never, only, always, all the ...などの断定的な表現を含んだ選択肢は内容とは異なった選択肢である可能性が高い。人間は内容を正確に反映しようとすると言葉遣いが慎重になり、「嘘をつこうとする」と言葉遣いが断定的になるのかもしれない。

次の選択肢は、若林・根岸(1993: 116-117)からとったものであるが、これらはスペース・シャトルについて知っていれば正解を得られるだけでなく、選択肢ウとエはonlyがあるために、テキストを読まなくてもきわめて「誤答くさい」見えてしまう。

- ア. The Columbia has a set of wings.
- イ. The Columbia can fly like an airplane but it can't land.
- ウ. The Columbia can be used about ten times only.
- エ. The Columbia carries only people into space.
- オ. Space travel will be inexpensive by using the Columbia.

## 選択肢に同じ語句を繰り返さない

まず、以下の文法問題を見てみよう。

Please ( ) this music.

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| A. listen to    | B. listen at |
| C. listen about | D. listen on |

この問題では、すべての選択肢に listen という単語が含まれている。この listen は、いわゆるステムの部分に移動することで、よけいな読みの負担をなくすることができる（下記参照）。また、これによりテストリング・ポイントが明確になる。

- |                               |       |          |       |
|-------------------------------|-------|----------|-------|
| Please listen ( ) this music. |       |          |       |
| A. to                         | B. at | C. about | D. on |

このような視点が適用できるのは、文法問題に限らない。リーディングやリスニングの内容理解問題でも、重要な視点である。

#### 当てはまらないものを選ばせない

多肢選択式テストでは、「次の選択肢の中から、当てはまらないものを選べ」という問題を見かけることがある。このような問題では、受験者はつい「当てはまるもの」を選んでしまうために、いわゆる「できる」受験者でも間違ってしまう確率が高くなる。したがって、当然問題の信頼性も下がってしまう。特別な事情がない限りは、このタイプの問題は避けるべきである。

#### 文法的に正しい選択肢とする

文法知識を測定しようとしている問題（誤文訂正など）は別であるが、それ以外の場合は、選択肢はすべて文法的に正しいものでなければならない。次の問題を見てみよう。

- |                                            |               |
|--------------------------------------------|---------------|
| An animal which has a long neck is a ..... |               |
| A. giraffe                                 | B. elephant   |
| C. rabbit                                  | D. rhinoceros |

この問題では、不定冠詞の a がついているために B は文法的に排除されてしまう。語彙の知識を見たいのであれば、次のように書き換えるべきである。

- |                                          |                 |
|------------------------------------------|-----------------|
| An animal which has a long neck is ..... |                 |
| A. a giraffe                             | B. an elephant  |
| C. a rabbit                              | D. a rhinoceros |

#### 選択肢の数は 4 が基本、苦しければ 3

多肢選択式テストでは、選択肢の数をいくつにするかは悩みどころである。確かに選択肢の数が多いほど、当て推量による正解の確率は下がってくる。ただ、むやみに選択肢の数を増やしても、増やした誤答の選択肢 (distractor) がみな有効であるとは限らない。誰も選ばない選択肢というものも少なくはない。実際、能力のある受験者は決して選ばず、能力がない受験者だけが選んでしまうような「いい誤答の選択肢」を 3 つも書くことは容易ではない。したがって、場合によっては、3 択の多肢選択式テストとすることもあり得るだろう。

#### リスニング・テストの選択肢作り

選択肢の作り方で、問題の弁別力が大きく変わってきてしまうことがある。弁別力とは、能力のある受験者と能力のない受験者を弁別する程度のことをいうが、ときに能力のある受験者とない受験者の出来があまり変わらなかったり、ひどい場合はその関係が逆転したりしていることがある。

多肢選択式のリスニング・テストを作るときには、どのような選択肢をどう並べるかにより、項目の弁別力が違ってくる。能力の低い受験者は、聞こえた語句がそのまま含まれる選択肢を選ぶ傾向がある。したがって、これが正解の選択肢となっていると、真の理解を伴わなくても正解を得られてしまい、テスト項目の弁別力は低くなってしまふ。逆に、聞こえた語句を含んだ選択肢が正解とならず、別の選択肢が正解となっている場合は、弁別力は高くなる。

したがって、難易度と弁別力の高い項目を作成しようとする場合は、該当部分のスク립ト中の語句をそのまま正解の選択肢に入れずに、スク립トの内容を表してはいるが、あえて異なった表現を用いたものを正解の選択肢としておくとよいだろう。もちろん異なった表現を用いる場合には、その同義性の確保には細心の注意を払わなければならない。

#### 【参考文献】

若林俊輔・根岸雅史（1993）『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る—正しい問題作成への英語授業学的アプローチ— 大修館書店